『ONE BOOK ONE LIFE』別冊号1986年9月10日第1号発行

# ろくおん通信

発行日 '97年12月15日

No. 98

発行 盲人情報文化センター
録音製作係

処理を考える(25)

## 音声訳に「処理の基準」があるのか

日盲社協が1984年に発行した『レコーディングマニュアル』は主にリクエスト図書の音声訳を念頭に書かれているが、「処理とはなにか」の項では「墨字資料に盛り込まれている情報をどこまで音声化するか、その目安となる基準を定めるのが処理である。」とあり、「どこまで音声訳化するかはどうかは、利用者・用途・原本によって決めていくこと。専門書はより原本に忠実に、娯楽書は忠実度は低くなる。」とあります。これが、1992年に改訂された『活動するあなたに』では、「処理とはさまざまな形で表されている文字表現などを、意味を変えることなくそのままに音声に変換する音声訳の中心概念で、音声化の基準と方法を指す。」また、別のところでは、「処理の目的は墨字原本の文意から外れてしまう危険性を避けるため」ともあります。

しかし、「処理の基準は」となると「気楽に聞いてもらう本、神経の集中と努力を要する本などによって基準を決める。」となっています。改訂版では「処理」の理念は変化していますが、あくまで「処理の基準」にこだわっており、その意識は1984年のままといった状況です。

もともと処理とは、「そのまま普通に読んだのでは墨字原本の文意が正しく伝わらない時に音声訳者がより原文の意味を正しく伝える為に行う処理」のことですから、専門書であろうが娯楽書であろうが、あくまでも正しく伝わるかどうかが基本で、本によって「処理の基準」があるわけではありません。原本の種類や内容といったものはあくまでも必要な処理を行うにあたって一つの「要素」にすぎないものです。

そのまま音訳したのではその原本の特徴が生かされないような時に、より工夫をするのが「構成上の処理」で、普通にそのまま読んだのでは意味が正しく伝わらないときに、さまざまに工夫するのが「音声訳上の処理」となります。

この処理の部分に関しては実は点訳とも一致します。つまり、点訳でも「墨字の表記通りに点訳すると、墨字の意味通りに伝わらない」ケースがあり、そうした場合、点訳者が何らかの処理をして点訳するわけです。この点訳の処理と音声訳の処理とは基本的に一致するものです。この点訳の場合も原本によって「処理の基準」が決まるようなものではありません。処理はあくまでも原本の内容で一つひとつ問題になり、個々に最もふさわしい処理を検討していくべきものです。

## 今月の練習問題

**「ひまわり」ってなに？**　　＊カッコの処理

「ひまわりってなに？」「夏に咲く花です」では一行で話が終わってしまう。
「ひまわり」は、日本が誇る静止気象衛星である。東経一四〇度の赤道上空、約三万六〇〇〇キロに位置し、雲の分布、高さ、動きなどを観測している。テレビや新聞でおなじみの、あの雲画像を日々提供しているのが「ひまわり」である。

静止気象衛星の”静止”とは、ぴったり止まって動かないという意味ではなく、地球の自転と同じ速度で動いているので地球から見れば静止しているように見えるという見かけ上の静止である。中国で「同歩衛星」と呼ばれていることを考えればわかりやすい。実際には静止どころではなく、一分間に百回のスピードでぐるぐる回転して見かけ上の静止を保っている。

静止気象衛星は世界中に五個あって、地球上空をくまなく観測できるようになっている。日本では一九七七年にひまわり一号が打ち上げられて以来、現在は四号、五号が活躍中である。

五号は九五年に打ち上げられた最新型で、雲だけでなく水蒸気量まで観測できるというスグレモノ、いわば期待の（衛）星である。

とまあ、そこまではいいとして、五号まで打ち上げたということは一号、二号などはどこへ行ってしまったのか。

ひまわりは東経一四〇度の上空に落ち着くようになっているが、新ひまわりがやってくると旧ひまわりは最後の燃料で作動し、軌道を離れて永遠に宇宙空間をさまようことになるのである。

ところで、日本の気象衛星はなぜ「ひまわり」という名前なのか。

まず、花の名前をつけようということになり、一号の打ち上げが夏だったので、夏の花といえばヒマワリ、ということで「ひまわり」になったという。また、ヒマワリは「向日葵」の名のとおり、太陽のほうを向いて咲くといわれている。そんなふうに気象衛星が地球のほうを、向いているようにという意味も込められているらしい。もっとも、ヒマワリが太陽のほうを向いて咲くというのはイメージの問題で、実際、たくさんのヒマワリが咲いているところを見ると、花の向きはバラバラである。

それはともかく、ヒマワリという植物は、ちょっと特殊な芸をやってのける。水に溶けた放射性物質や毒性物質を吸い上げて土をきれにする作用があるのだ。ウクライナが旧ソ連時代の核ミサイルをすべて解体、はれて非核国になった記念に基地跡に植えられたのは、ヒマワリの苗だった。

**「日本語の特質」**　　**金田一春彦**　　＊表記が問題

志賀直哉の苦心

昔、こういう経験をいたしました。私の大学時代には、谷崎潤一郎さんの『文章読本』が、いやしくも文章に志す者はぜひ読まなければいけない、コーランのような力を

持って君臨しておりました。その中で谷崎さんが、志賀直哉の『城の崎にて』という作品を絶賛していました。『城の崎にて』という作品は、神経衰弱になった人が、自殺を考えて城の崎温泉に行く、そこで、ネズミとハチとイモリが死ぬところを見ているうちに死ぬ気持ちがなくなってくるという話であります。これが、谷崎さんによりますと、短編小説の模範的な、一字のムダもない作品なのだそうです。その中にこういうところがあります。

二階の部屋におりますと、下の部屋の瓦屋根のところにハチが巣をつくっている。そこからハチが外へ飛び出すところを描写しているのですが、ここで、作者は「直ぐ細長い羽根を両方へしっかりと張って（ハチが）ぶーんと飛び立つ」と書いています。谷崎さんは、この「ぶーん」というのはこれでなければいけない、これではじめて、例のニブい響きを持った鈍重なハチが飛び立っていく姿が出るのだ、と言っている。私は、大学時代にこれを読みまして、さっぱり、そういった感じがしませんでした。片仮名でブーンと書いてもいいじゃないかと思ったりしまして、これがわからないのでは、自分は文学の道へ進むことができないのではないかと自信を失った思い出がありますけれども、今思うと「ぶ」というところにはハチの太った感じがあって、その次の「ーん」というところはまっすぐに飛んで行く気持が出ているというのでしょうか。そのように、いろいろと表現に凝るような人にとっては、漢字、平仮名、片仮名の使い分けというものは便利だと思います。

現代の日本では、この仮名、漢字のほかにアラビア数字、ローマ字が入って来ております。たとえば、ＤＤＴとかｋｉｏｓｋとか。Ｘ光線やＹシャツぐらいならいいのですけれど、ＯＸ主義と書いてマルクス主義というのがあるそうですね。場末のレストランへ行くと、ハムｘという文字が壁に貼ってあるのを見ましたが、これはハムエッグスと読むのだそうです。慶応大学へ行きますと、KO大学という文字が盛んに使われておりますが、たしかにこう書いた方が簡単です。

## 先月の問題の検討

※　今回の例文は外国語でした。外国語で何でもつづりを言う方がいいとはかぎりません。普通に読んだらよくわかるのにつづりなどを言うことで混乱させることもあります。

## 外国語のアクセント

Q．外国語のアクセントはもとの外国語と同じアクセントにすべきだと思うが、放送ではどうしているか。

A．放送では、日本語として自然なアクセントで発音することにしている。外来語は基本的には日本語の一部であり、そのアクセントも日本語のアクセント体系に従うのが当然と考えられる。

外来語のアクセントをもとの外国語（原語）のアクセントと同じにしようとすれば、アクセントだけでなく、発音そのものも原語と同じにしなければ不自然になるだろう。たとえば、野球用語の「ストライク」の原語の発音は[straik]と1音節で、アクセントも[ai]の前半の部分を強く発音する強弱アクセントである。一方、外来語としての発音は[sutoraiku]と5拍で、アクセントは[ai]のところで音の高さが高から低へと変化する高低アクセントである。これを[sutoraiku]と英語風に強弱アクセントで発音すると、日本語としては不自然に聞こえる。もっとも、この場合、アクセントの位置は外来語・原語共通であり、その限りで原語とアクセントは同じだという見方もできる。

しかし、この位置だけ合わせるという方法を用いるにせよ、外来語のアクセントを原語のアクセントと常に同じにすることはできない。たとえば、[イメージ・バドミントン・ヘリコプター]などは、原語と同じ位置にアクセントを置くと、[イメージ・バドミントン・ヘリコプター]となる。これらはいずれも日本語としては奇妙な印象を与えるだろう。

なお、標準的な外来語アクセントは、[アスファルト]のように、語末から3拍目で音の高さが高から低に変化し、[キャンセル・スチュワーデス]のように、語末から3拍目に[ン・ッ・ー]や二重母音の後半部分などがきた場合には、変化の位置が1拍ずつ前にずれる。しかし、これには例外も多い。

## アクセントの平板化

Q．最近、ゲーム、ギター、マネージャーといった外来語を平らなアクセントで発音する人が増えているが、違和感がある。

A．ゲーム、ギター、マネージャーのように、普通は起伏型で発音される語を、ゲーム、ギター、マネージャーのように平らな（平板型）アクセントで発音する人が最近増えている。この現象は一般に「アクセントの平板化」と呼ばれている。

この現象が特に顕著に認められるのは、ある分野に専門的に携わる人が、その分野に関係のある外来語を平らに発音する場合で、たとえば、情報処理関係の人は、データ、ディスク、エディター、音楽関係の人は、ギター、ドラム、テレビ関係の人は、ドラマ、マネージャーといった具合になる。一般には、これらの外来語は、外来語のアクセント規則（原則として、後ろから3拍目でアクセントが高→低と変化する）に従って起伏型で発音されるのが普通であろう。アクセントには、初めは起伏型でも、

頻繁に用いられているうちに平板化に変化する傾向があると言われており、特定分野での平板化現象については、一応の説明が可能である。

実は、このアクセントの平板化は今に始まったものではない。現在では平板型が一般的であるアマチュア、ダイヤル、ハート、ボーイなども、かつてはアマチュア、ダイヤル、ハート、ボーイと起伏型で発音されていた。また、外来語だけに見られるものでもない。「会社、電車、電話、映画」などの漢語も、起伏型から平板型に変化した語である。違和感があるうちはともかく、平板型であっても一般化すれば放送でも使用することになる（ＮＨＫ編『日本語発音アクセント辞典』に記載のないアクセントは原則として放送では使わないことになっている）。

ＮＨＫでは、今後、アクセント調査などで平板化の実態を調べ、次の改定時に、新しい平板型をどの程度採り入れるかを検討して行く。

つづく

## 二通りの読みがあって意味が異なるもの（５３）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 音声 | ｵﾝｾｲ　声　言語<br>ｵﾝｼﾞｮｳ 音　楽器 | 足高 | ｱｼﾀﾞｶ　人・動物などの足の長いこと。<br>ﾀｼﾀﾞｶ　江戸幕府の職俸制の一 |
| 生気 | ｾｲｷ　いきいきした勢い<br>ｼｮｳｹﾞ　九星占いでいう星の名。 | 人工 | ｼﾞﾝｺｳ　人の手を加えること。<br>ﾆﾝｸﾞ　禅宗に属した下僕<br>ﾆﾝｸ　土木建築関係などで作業量を表す語。 |
| 野手 | ﾔｼｭ　投手と捕手を除く守備がわの選手。<br>ﾉﾃ　武家時代、野の収益に課した雑税。 | 足切 | ｱｼｷﾘ　選抜試験などで一定の基準をもうけて、それ以下は切り捨てること。<br>ｱｷﾞﾚ　足の指の切り傷。 |

『言葉に関する問答集』文化庁編より

### （問）「初孫」の読み

（答）「初めて生まれた孫」のことを「ういまご」、又は「はつまご」と言う。

「うい」は「初めての、最初の、生まれて初めて」の意を添える成分で、初冠（ういこうぶり）、初琴（ういごと）、初産（ういざん）、初陣（ういじん）、初奉公（ういぼうこう）などと用い、「事に当たって初心で、不慣れでぎごちない」というのが、もとの意味である。

「はつ」は「ある一定の周期ごとの初回、たとえば一日、一年などの初め」の意であることが多く、初午(はつうま)、初荷(はつに)、初春(はつはる)、初日(はつひ)、初参り(はつまい)、初詣(はつもうで)などがある。本来の意味は、「季節の最初にちらっとあらわれる自然現象」のことで、初草(はつくさ)、初霜(はつしも)、初鶯(はつうぐいす)、初鰹(はつがつお)などと用いる。ただし、「初節句」や「初舞台」などは、一生涯(がい)における初めての意味である。　昭和二十三年の「当用漢字音訓表」には、「初」に「うい」の訓がなかったので、「うい孫」と書くことになっていたが、昭和四十八年の「音訓表」に「うい」が掲げられており、「初陣、初々しい」の用例が見られる。

ＮＨＫの『放送用語ハンドブック』には、「[ハツマコ゜]……現代ふうの言い方。[ウイマコ゜]……昔ふうの言い方。」の注がある。なお、「初産」は、[ウイザン][ハツザン]の両様の形を認めている。

## 「依存」は「イソン」か「イゾン」か。

（答）　「本年度の歳入不足額は、全面的に赤字国債に依存する。」「ＡとＢとは、互いに依存関係にある.」などと言うときの「依存」（すなわち「他の物事によりかかって依存すること。」とか「他を頼りとすること。」とかの意を表す語）は、どう読んだらよいのか。

この語は、漢和辞典では、「イソン・イゾン」の両形を読みとして掲げるものが多いが、その順序は、必ずしもこの順ではない。また、国語辞典に、「依存」が採録されるようになったのは、比較的新しいことのようであり、明治から昭和の中ごろまでに編集・刊行されたものには、この語を採録していないものが多いようである。それ以後のものには、ほとんど採録されているようであるが、「イソン」か「イゾン」かということになると、まちまちである。ところが、近年の編集にかかる辞典では、見出しとして「いそん」を採るものが主流を占め、語釈の後に「いぞん」の語形を載せているものと、いないものとがあるようになってきた。

ＮＨＫでは、放送用語としては「イソン」を採り、「イゾン」は原則として使わないことにしている。　また、「イゾン」と発音する語には、従来からよく使われる語に「異存」があり、「依存」を「イゾン」と言うと、これと同音異義語の関係を生ずることになる。このようなところから、「イソン」が次第に優勢になってきたと見ることができるのではなかろうか。

## 「発足」は「ホッソク」か「ハッソク」か。

（答）　「発足」を、「出発」「旅立ち」というような意味で使った場合には「ハッソク」と言うのが一般的であったと思われるが、今日では、「発足」という語をこの意味では使わないのが普通である。現代語としての「発足」は、組織・機関・制度などの活動の開始といほどのことを意味している。そして、この場合の発音は、伝統的・規範的な発音としては「ホッソク」である。

しかし、同時に、今日では「ハッソク」が盛んに行われているところを見れば、「ハッソク」を全く否認するわけにはいかないであろう。そうかといって、現在のところでは、「ホッソク」に代わって、「ハッソク」が現代語としての新しい標準的な発音になったとまでは言うことはできないであろう。

「発」には、漢音「ハツ」、呉音「ホチ」、慣用音「ホツ」がある。「発意・発願・発起・発句・発作・発心・発端・発頭人・発熱」など、いずれも古くは「ホツ（ホッ）」であったが、今日では「発意・発熱」などは、むしろ「ハツ」と言うのが一般的である。しかし、「発願・発句・発作・発心・発端」などは、まだ「ホツ（ホッ）」の方が標準的であると認めてよく、「ハツ（ハッ）」を採ることにはためらいを感ずるであろう。もっとも「発作」には「ハッサ」という言い方もあるようであるが。

このほか、「発議・発疹・発赤」などは、他の語にならって「ホツ（ホッ）」の形もあるが、いずれも比較的新しい言葉であり、むしろ「ハツ（ハッ）」の方が一般的であると言えよう。

現行の内閣告示「当用漢字音訓表」で、「発」について、「ハツ」・「ホツ」の二音を掲げ、「ホツ」の例として、「発作・発端・発起」を掲げている。また、「ハツ」の例としては、「発明・発射・突発」を掲げている。

## 利用者から製作依頼を受けている原本

| 書　名　　＜分類＞ |
|---|
| 『ニュースキン徹底知識』伊勢龍彦著　＜化粧品＞　246頁 |
| 『ＩＤＮハンドブック成分と作用がわかる本』伊勢龍彦著　＜医学＞ |
| 『ＩＤＮがあなたを守る　これでガン・成人病は怖くない』ニューライフ出版編著　＜医学＞　278頁 |
| 『３００１年終局への旅』ｱｰｻｰ・Ｃ・ｸﾗｰｸ著　＜外国文学＞　294頁 |
| 『私のまわりは美しい』松井るり子　＜教育＞　四六判　205頁 |
| 『クッキングブック』ﾘｰｶﾞﾙ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ編　＜料理＞　A5判　16頁 |
| 『地獄からのメッセージ』Ａ・J．クィネル著　＜小説＞　文庫　400頁 |
| 『カメの衣・食・住』徳永卓也著　Ｂ５判　141頁 |
| 『クリエイティング・マネー』サネヤ・ロウマン他著　＜心理学＞四六判　387頁 |
| 『福祉国家はどこへゆくのか　日本・イギリス・スウェーデン』 |

ｱｰｻｰ・ｸﾞﾙｰﾄﾞ著　<社会福祉>　270頁
『シバ謀略の神殿』ジャック・ヒギンズ著　<小説>　A５判　250頁
『ディスカバリー世界の実相への接近』<宗教>　B5判 308頁
『ヨセフとその兄弟　II』　<宗教> B4判 620頁
『ヨセフとその兄弟　III』　<宗教> B4判 562頁

以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か５分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音についてのチェックと共に、必要があれば録音技術のアドバイスをさせていただきます。

## 今回引き受けて頂いた原本とグループ

| | |
|---|---|
| 『花影の城　最後の赤松一族』寺林峻著 | ﾃｰﾌﾟﾗｲﾌﾞﾗﾘｰにしのみや |
| 『殺人探究』フィリップ・カー著 | 〃 |
| 『魔法のタワシ　洗剤なしだから環境にやさしい』 | 〃 |
| 『魂の保護を求める子どもたち』ﾄｰﾏｽ・ﾖﾊﾈｽ・ｳﾞｧｲｽ著 | えくてもあ |
| 『ファウスト　１』　高橋義孝著 | 音訳ｸﾞﾙｰﾌﾟSEI（せい） |
| 『ファウスト　２』　高橋義孝著 | 〃 |

**訂正とお詫び**

先月号で、『ファウスト１』『ファウスト２』の音訳を引き受けて頂いたｸﾞﾙｰﾌﾟ名を「箕面」としましたのは「音訳グループＳＥＩ（せい）」の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。

＊９８年１月は『ろくおん通信』はお休みです。